実行団体 事後評価報告書	愛知県県営住宅自治会連絡協議会	活動地域	愛知県 豊田市
多文化多様性の輝く保見団地プロジェクト		E-mail kenei.tabunka@gmail.com URL https://projetohomi.jimdofree.com/	
資金分配団体名 資金分配団体事業	一般財団法人 中部圏地域創造ファンド 名 NPO による協働・連携構築事業	事業の種類 草の根 実施期間 2020 年	

## 1 事業概要

	豊田市にある県営保見住宅(1975 年に入居開始)は、約 3000 世帯の内、外国籍住民が約 7
社会課題	割、日本人住民が約3割。その中で、①ルール違反のゴミ投棄、②多様な住民が団地内で交流
	できる機会の不足、③自治区機能の維持の困難、という課題が存在する。
+***m=	県営住宅を中心に約 800 世帯の住民を対象に、また、彼らの参加に働きかけながら、①ルー
事業概要 対象者	ル違反のゴミ投棄を減らす、②集会所・団地内で楽しめる活動を活性化する、③自治活動・自
刈氷石	治区活動への参加を促進する、ための活動を実施する。
中長期	事業実施を通して目指す姿は、ゴミ団地の汚名返上、集会所や団地内での交流活動・自治グル
目標	ープ・自治区活動によって、県営保見住宅が暮らしやすい団地、楽しい団地になること。
	自治区の仕組みに関心を持ち、一斉清掃等や防災などの活動をコミュニケーションの場とし
活動方針	て前向きに受けとめて参加し役割を担う住民が増えることを目指す。同時に、花植え活動や
心乳刀到	多世代の交流など、自主サークル的な活動を顕在化し、楽しく顔の見える関係づくりが進む
	ことも応援する。







「きれい」「楽しい」団地にしたい

3 年間の活動の成果	
多様な住民によって立ち上がった自主活動団体の数	3 団体
保見団地の将来に向けたビジョンの作成	3月に完成予定
多文化多様性の輝く保見団地センターの設立	設置要綱制定済 2023 年 4 月設立
関係者会議への参加団体数	21 団体
地域課題解決や地域の人が活躍するコミュニティビジネスのシナリオ	事業当初より進めていたリ ユース工房が住民への周知 不足のため中断。 試行錯誤す る中で別のシナリオを作成

## 2 事後計画の記載内容

**2-1主な活動とアウトプット** ※アウトプットの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023年3月

### 活動1

- ・保見地区の実態やニーズの情報、先行事例研究を整理しつつ、各実行団体の行なう対象地域内の外国人 や棟長等に対する調査の全体的な調整を図るための会議を行なう。(1-1)
- ・外国人住民に対する情報提供の方法について検討会議を実施する。(1-2)
- ・外国人に対して講座や個別サポートを行い、自主活動(コミュニティビジネス含む)の立ち上げを促進する。 (①活動理念②活動研究・現状把握③活動のためのワークショップ④コンセプト⑤ニーズ分析⑥活動内容構想⑦プレゼンテーション⑧実践アドバイス⑨ふりかえり)。(1-3)

アウトプット	実行団体が外国人住民等調査検討会議に参加する。		
	①開催回数 ②実態やニーズに関わる状況把握の度合い		
	初期値	目標値	実績
指標 1-1	①無	①年3回(初年度)	①年4回(1年目)
	②状況把握が個別的で不明確	②実行団体内で状況を把握共有	②実行団体内で状況を把握共有
		している	

アウ	<b>ウトプット</b>	実行団体が多言語情報発信検討会議に参加する。		
		①開催回数 ②多言語情報発信に関わる担い手の把握		
		初期値	目標値	実績
指標	票 1-2	初期値)①無	①年2回	①全体1回・テーマ毎に検討
		②状況把握が個別的で不明確	②実行団体内で状況を把握共	(チーム会議で毎月状況確認)
			有している	②実行団体内で状況を把握共有

アウトプット	外国人住民が自主活動促進講座に参加する。		
参加者数			
指標 1-3	初期値	目標値	実績
	初期値)無	目標値)年 20 名	実績)年18名(1年目)

### 活動 2

- ・保見団地センター立ち上げに向けて、チーム内の意識や情報の共有を図り、事業・財政計画や運営体制を策定するための、チーム会議を開催する。(2-1)
- ・対象地域内の外国人が自立して暮らすことにつながるコミュニティビジネスのシナリオを検討する会議 を開催する(外国語による情報発信、保見お助け隊(なんでも屋)、リユース工房等)。 (2-2)
- ・チーム構成団体や関係団体、自主活動促進講座参加者などを含め、当プロジェクト終了後の協議体や自 治区のあり方など保見団地の将来ビジョンを検討する会議を開催する。(2-3)
- ・交流会の形式をとり、堅苦しくない雰囲気の中で、保見団地の将来ビジョンについて住民の意見を聞く ための意見交換会を開催する。(2-4)

アウトプット	実行団体がチーム会議に参加する。		
	開催回数		
<b>指標 2-1</b> 初期値 目標		目標値	実績
	初期値)無	目標値)年 10 回	実績)年 12 回(月一回開催)

アウトプット	コミュニティビジネス等検討	会議開催によって、コミュニ	ティビジネスのシナリオが明確	
7 7 1 7 7 1	化する。			
	シナリオの作成			
1141= 4 4	初期値	目標値	実績	
指標 2-2	初期値)無	目標値)作成	実績) 当初より進めていたリユ ース工房は中断したが、別のシ	
			ナリオを作成	

アウトプット	実行団体や関係者が将来ビジョン検討会議に参加する。		
	①開催回数 ②ビジョンの作成		
指標 2-3	初期値	目標値	実績
141X = 0	初期値)①無 ②無	目標値)①年2回 ②作成	実績) ①2 年目後期より月一回 開催 ②2023 年 3 月までに完成

アウトプット	団地住民が住民との意見交換会・交流会に参加する。		
	参加者数		
指標 2-4	初期値	目標値	実績
	初期値)無	目標値)年30名以上	実績)42 名(WS 参加者)

## 活動 3

- ・愛知県住宅供給公社、愛知県県営住宅管理室・多文化共生推進室、豊田市、在名古屋ブラジル総領事館、地域の団体等と各課題実行団体とをつなげ、事業実施の協力を得るための関係者会議を開催する。(3-1)
- ・外国籍住民と日本人住民の多文化・多様性が輝くコミュニティのあり方について知見をまとめ、他地域 へ発信や政策提言を行う。(3-2)

アウトプット	事業実施への協力に必要な関係者が関係者会議に参加する。		
	①開催回数 ②構成員(団体	<b>本)数</b>	
指標 3-1	初期値	目標値	実績
1月1示 3-1	初期値)①無②無	目標値)①年2回以上 ②年7団体以上	実績) ①年2回 ②21団体(最終)

アウトプット	・ 多様性・多文化が輝くコミュ	多様性・多文化が輝くコミュニティのあり方について発信や政策提言を行う。		
	政策提言の数			
指標 3-2	初期値	目標値	実績	
3H.W. 0 -	初期値)無	目標値)5つ	実績)将来ビジョンの提案で代 用(提案数 18)	

## 2-2 3年間のインプット

		 十画値	実績値		
	事業費 (自己資金	含む)	事業費 (自己資金含む)		
次人	直接事業費	14,987,800 円	直接事業費	12,343,000 円	
資金	管理的経費	1,134,000 円	管理的経費	1,261,000 円	
	評価関連経費	748,500 円	評価関連経費	206,000 円	
	内部:合計5人		内部:合計2人(責任者1人、担当者1人)		
人材	(責任者1人、担当	者1人、補助3人)	外部:合計5人(多文	化共生専門家 4 人(大橋、	
	外部:合計1人(多)	文化共生専門家1人)	化共生専門家1人) 大谷、塚本、鈴木)、将来ビジョン		
資機材・					
その他		_		_	

### 1) 資金インプットの特徴、主要な支出項目

人件費/謝金 : プロジェクトを取りまとめるコーディネーター、プロジェクトの事務局員、将来ビジョン 作成にあたり助言と講師、作成を担う専門家

物品費 :プロジェクト全般に必要な文具消耗品、コロナ対策品の購入、事例調査にかかる経費

### 2) 自己資金の種類、資金調達で工夫した点

プロジェクト開始時より、会員への事業説明を丁寧に行い、団体の会費および寄付金収入を自己資金 に充てた。

### 3) 人材インプットの役割分担等

コーディネーターと事務局は職務を文章し責務を全う。外部人材として、事業を通して地域づくりの実績がある専門家に出会い、将来ビジョンの作成を依頼。その他大学教授や多文化共生の専門家などに会議等への参加を依頼。

## 3 事後評価の方針

## 3-1 評価の体制

外/内	氏名	所属・役職	評価の分野		
内部	八巻理絵	県住協事務員	全般		
外部	大橋充人	オブザーバー/愛知県 立大学客員共同研究員	全般		

### 3-2 事後評価のポイント

1	保見団地の実態やニーズに基づいて、多様な住民たちの自主活動団体が立ち上がったか。自主
	活動団体は、顔の見える、支え合う関係づくりに貢献する見通しがあるか。
2	多様性・多文化が輝く保見団地の将来ビジョンを住民と共につくることができたか。
3	保見団地の地域づくりの拠点として「多文化多様性の輝く保見団地センター」を設立すること
	ができたか。
4	関係者会議を通して、団県住宅供給公社、愛知県、豊田市、在名古屋ブラジル総領事館、地域
	の団体等との定期的な会議を行う仕組みができたか。関係者会議を通して多文化多様性の輝く
	地域づくりは前進したか。
5	コミュニティビジネスのシナリオは明確化したか。地域課題解決や地域の人が活躍する内容に
	なっているか。

## 4 事業の主要な成果と、それを実現した要因分析

※アウトカムの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023年3月

# 4-1 保見団地の実態やニーズに基づいて、多様な住民たちの自主活動団体が立ち上がったか。自主活動団体は、顔の見える、支え合う関係づくりに貢献する見通しがあるか。

成果1	自主活動団体の立ち上げと自主サークルの把握						
アウトカム	①自主活動団体数 ②地域で継続的な活動をする自主サークル数						
指標 1	初期値	目標値	実績				
7日1示 工	無	①3団体以上	①3 団体				
		②10 団体	②10 団体以上				
	・この3年間で新しく立ち上がり、活動している団体に調査を行った。						
	(高齢者サロン、子育てサロン、JUNTOS)						
評価方法	・自主サークルは活動を通じて把握した団体をリスト化し調査を行った。詳網						
	たものは 8 団体のみであるが、16 団体把握しているため、目標値は達成できたとして						
	10 団体以上とした。						

### 1)確認できた事実・成果

## ●高齢者、子育て世帯の小さなグループに実行団体が伴走しながら団体の継続性を探った

### <子育てサロン>

子育て世帯に声をかけ、日本でいう子ども会のようなものをイメージした将来像を話し合った(2021 年6月26日、7月3日 県営集会所)。その後住民主体でイベントを企画運営したり、課題を一つ一つ解決していくプロセスを踏みながら独立した運営方法を探っていった。資金集めや管理などにはまだ課題が残るが、無理のない運営方法や利用できる施設情報など、外国人の親たちが「できる」ことが増えたことで今後も継続の可能性はある。イベントを介して特技を持つ住民ともつながり、今後の展開に期待できる。(ダンス1名、ネイル1名、写真2名、マッサージ1名、ケーキ作り1名、幼児保育2名、心理士1名)。

### <高齢者サロン>

当初は、外国人高齢者を想定していたが、実際には日本人高齢者の参加が多かった。サロンでの活動から、個別に高齢者の困り事に対するお手伝いも必要だということがわかり、「高齢者お手伝い」の活動にもつながった。また、サロンを通じて、日本人住民とのつながりが生まれ、団地内のプロジェクトの浸透に役立った。

#### <JUNTOS>

実行団体の活動から子どもの学習支援グループが立ち上がった。当初は実行団体も伴奏し、アドバイス 等も行ったが、次第に自分たちで考え自主的に活動するグループへと成長した。

### 2) 成果(課題)が生まれた要因

### ●意識啓発の多様化・日常化・自分ごと化

団地に住む子育て世帯はほぼ外国人である(住民アンケート調査報告書 P17)。国籍もブラジルだけではなく多国籍化傾向にある。団地内に子どもはたくさんいるのに親子が遊ぶ場所、集う場所がない、あるいは整備されていないというのはずっと課題としてあった(報告書 P33)。必然的に家族は団地の外に憩いを求め休日は車で出かけるというパターンが出来上がった。最初の話し合い時に、自分たちの住む地域(団地)にも楽しいことがある、できる、したいという思いはあることを確認し、そのためにで

きることを話し合い、課題を一つ一つ解決していった。自分の子どもたちが通学する道、遊ぶ公園など、子どもたちが行動する範囲の良いところを見つけ、それらを楽しい安全な場所にしなければならないという親の意識が高まった。

### ●子どもの声=騒音、外国人=悪いという日本人側の意識

1990 年入管法改正以来、日系人を中心に外国籍住民が増え、現在は団地住民の 5 割程が外国籍住民である (報告書 P3)。外国籍住民が住み始めた当初は、日本人側も新しい住人を受け入れようと様々な取り組みをしたが、時間を守らない、連絡がないなど、文化や習慣の違いによる理解不足からだんだんと交流の機会は減っていった。日本人住民は高齢化し、子育て世代が減る一方、外国籍住民は団地で育ち、親になるなど、外国籍の子どもたちが増えていった。日本人の子どもが減ったことで子ども会がなくなり、団地内の子どもたちは一緒に何かをしたり、地域で触れ合うといった経験をすることがなくなった。外国籍の子どもはたくさんいるのだから、何かできないかと考え、子育てをする親を中心に、子どもたちが楽しめることを団地内でやろうと子育てサロンを立ち上げ、日本とブラジルの季節の行事や、お母さんが楽しむ企画などを行った。日本の制度や順序を学び、許可を取るなど、日本では当たり前のことを実行団体と一緒に一つ一つ経験していく中で、日本人住民から「(子どもの声が) うるさい」「聞いてない」など、対応に困るケースもあり、言葉が分からないことに加え、注意を受けたことで活動が委縮することもあった。

一方で、高齢者サロンでは、日本人高齢者と外国籍の子どもたちが交流をしたり、大学生ボランティアが高齢者のお手伝いをするなど、いろんな国籍、年代の人が日本人の高齢者住民と接する機会を作った。フードパントリーを通して、挨拶を交わしたり、順番を譲り合ったり等、国籍関係なく、住民として触れ合う機会も増えてきた。

日本で生まれ、日本しか知らない子どもたちや、日本語が流暢な外国籍住民も実は多い。一人ひとりと話をしたり、一緒に何かをすることで、「外国人=悪い、怖い」という日本人側の意識を変えていく必要がある。

### 3) 気づきと今後に向けて

今回のプロジェクトで「自主的に活動している団体」の解釈に迷うことがあった。老人会のような既存のグループに伴走、気の合う仲間たちが時々行っている活動の拡大、ビジネスを目的とした活動など、すべてが地域の中で地域のために行われていることであり、短時間の託児や、おかずを分け合うことで行われる生存確認、団地内で鉄を集めること、FB グループで物の譲渡など様々なことがニーズに合わせて行われていることが分かった。

今回のプロジェクトで伴走、確認をした団体は3つとしたが、個人や有志の夜間見回りなど単発の活動が継続性のある団体になるのか、またその必要性があるのかなどの調査は引き続き行わなければならない。今回のプロジェクトを通して見えてきた、地域のために行われている活動(個人団体問わず)が把握できるような関係性を保見団地センターに引き継いでいく必要がある。

### 4) 成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

<子育てサロン運営スタッフの声>

「自分の子どもたちのためにもいろいろやりたいことはあるけど、仕事をしながらは正直大変。ハロウィンの仮装行列は団地の風物詩にしたい!

<在日大韓基督教会全国教会女性連合会(12月10日クリスマス会に参加)の感想>

「一緒に何かできないかとずっと考えていて、こういう形で関わることができて嬉しいです。韓国にルーツを持つ私たちの韓国語の歌を一緒に歌ったりできて、日本でいろんな国の文化でクリスマスを祝う

### ことが当たり前になるといいですね」

### <団地内の集会所や広場を活用したイベントの様子>









子育てサロン

### 4-2 多様性・多文化が輝く保見団地の将来ビジョンを住民と共につくることができたか。

成果 2	将来ビジョン WS の開催とパンフレットの作成						
アウトカム	①将来ビジョンの作成 ②ビジョンづくりへの住民の参加						
プラトカム 指標 2	初期値	目標値	実績				
14 lik - L	無	①作成 ②30 名以上	①2023 年 3 月完成予定 ②42 名				
	・将来ビジョン検討会議への参加人数						
評価方法	・将来ビジョン作成 WS に参加する住民の数						
	・フードパントリーなどを通した住民とのふれあいの中から生まれたアイデア						

### 1)確認できた事実

### ●チーム内で将来ビジョンのイメージを共有、検討を重ねた

将来ビジョン検討会議は、2020 年 11 月に 1 回目を開催し、2021 年 1 月にはビジョンを策定した団体の代表者から講演をしてもらったが、ビジョンのイメージの共有がなかなか進まなかったため、検討を一時中断。2022 年 1 月に、まちづくりの専門家を交え、検討を再開。以降、月 1 回のペースで検討を重ね、情報を共有し、意見交換を重ねてきた。実行団体または個人によって、課題意識や立ち位置も違うため、議論が進まないこともあったが、各立場で団地の将来を妄想し意見を出し合い、それを網羅するようなビジョンを少しずつ描いていった。「多文化多様性が輝く保見団地」を目指したチームであることから、その目的はブレることなく進めることができた。

### ●住民を対象とした将来ビジョン作成 WS の開催と雑談を通したアイデア

実行団体や関係者のみではなく、住民の意見も取り入れたいということから、住民を対象とした WS を計 3 回実施した(9 月 6 日 大人 11 名、9 月 7 日 大人 9 名、9 月 10 日 子ども 15 名)。参加住民は地域への愛着があり、こうしたいという希望や期待が高いことが分かった。また、自治区役員(10 月 2 日 7 名)とも WS を実施し、環境、交通。コミュニティの観点からの意見が出た。

その他、フードパントリーに併設したフリーコーヒーなど、実行団体の各活動の中で生まれた住民との ふれあいで出てきた活動も、将来ビジョンのヒントになることが多く、顔の見える関係を地道に続けて きた活動の成果の表れであると考えている。

### 2) 成果 (課題) が生まれた要因

### ●意識啓発の多様化・日常化・自分ごと化

自分の住む地域が、安全で住みやすく便利な場所だったらいいというのは誰もが望むことである。外国籍住民は「外国人だから」「言葉が分からないから」「仕事でいっぱいだから」などの理由から諦めてしまい、声を上げてこなかったし、長年住んでいる日本人住民は「外国人が増えたから」「高齢だから」「言っても変わらないから」などの理由で関わりを持つことをだんだん諦めていった傾向があり、住民アンケートの回答率や、毎月の清掃参加者の数からそういった傾向が読み取れる。しかし、ひとりひとりと向き合い話をすると、不満と同じくらい、期待することやこうなったらいいというような話題になる。実現できるかどうかは別として、こうしたいという希望を声に出すことは、物事が変わる第一歩である。聞く人がいて初めて伝わり、伝わったことで何かが変わるかもしれないという希望に繋がる。日常の不満や期待を話せる関係性や、日常に起こることを自分ごととして捉え、また他人にとっては違う考えや価値観かもしれないと想像することで、豊かな繋がりと将来期待できる地域になることができる。そうした意識啓発のきっかけになったことが成果である。同時に、関心を持たない層の掘り起こしは課題として残った。

### ●まちづくり専門家との出会い

当初の予定にはなかった将来ビジョンを描いた冊子(パンフレット)を作成するに至ったのは、当事業に興味を持ったまちづくりの専門家との出会いがあったからである。地域づくりの事例を紹介しながら、講師としてチーム内での意見をまとめ、住民WSにおいても、模型を製作して分かりやすく説明するなど工夫を凝らしたことにより気づきを与えてくれた。

### 3) 気づきと今後に向けて

団地住民である「県営保見自治区」、団地内で活動している「トルシーダ」、団地に隣接した「中京大学」それぞれの立場で活動を通し、住民と接することによって、団地の将来について考える機会が得られた。今後は、この3団体が中心となって、保見団地センターを運営していくことになるが、県や市、URの敷地内で様々な制約がある中で、将来ビジョンで描いた団地が少しでも実現できるように引き継いでいく。今回のプロジェクトはチームを組んだことで、将来ビジョンをより重層的、多角的な視点で考えることができたため、こうした枠組は残していきたい。

### 4) 成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

<WS での意見>

「昔は桜並木があって散歩道になっていた。復活してほしい」「移動スーパーが来てくれるといい」 「郵便局(ポスト)が遠い。県営集会所あたりに一つポストを作ってほしい」

「東保見小の東と 25 棟の南にある古墳を活かす」「保見団地を次の愛知県国際芸術祭の会場にする」 「花を植えたいという住民を支援する」「高層棟の屋上をビアガーデンにする」

「中公園にバスケットコートなどを作り、スポーツ教室を開催する」

「バーベキューができる場所」「池を釣り場にする」「池にいかだを浮かべる」

「外壁のフェンスをきれいにする」

「歩車分離にして、学校や買い物に、道路を横切らなくてもよいようにする」

「道路にバンプを設置するなどして、車のスピードを抑制する | 「コミュニティバスを運行させる |

「浄水駅⇒保見駅⇒保見団地の間を自動運転車の試行区間にする」

「自治区を小分けにし、住民間のコミュニケーションを促進する」

「行政、会社、自治区が一緒に意見を出し合う場をつくる」

### <WS やフリーコーヒーの様子>







# 4-3 保見団地の地域づくりの拠点として「多文化多様性の輝く保見団地センター」を設立することができたか。

成果3	保見団地センターの設置要領の制定							
	「多文化多様性の輝く保見団地センター(仮称)」の設置及び運営要領の施行							
アウトカム	初期値	目標値	実績					
指標 3	無 「多文化多様性の輝く保見団地センター(仮 設置要領制定(センターの設 称)」が設置され、運営要領ができている 置は 2023 年 4 月 1 日から)							
評価方法	設置要領の制定の有無							

### 1)確認できた事実

### ●核となる団体でセンターのイメージを作成し、チーム内で検討

保見団地センターの運営の中心になるのは、地域で活動を続ける県営保見自治区、トルシーダ、中京大学であることから、三者でイメージを話し合ったところ、目的は、プロジェクトと同じ「保見団地において、多様な住民が支え合い、顔の見える関係性が息づく、あたたかい故郷のような地域・社会になることをめざす」にし、主な事業内容は「住民がなんでも聞ける話せる場づくり」「保見に関わる団体・個人のネットワークづくり」「住民が一緒になって行う活動」となった。これを設置要領の形で明文化し、チーム内で共有し、検討を行い、制定に至った。

### ●関係機関との調整

当初のイメージとしては、具体的な場所として、空き部屋を活用できないかと考えていたが、管理者等との調整の中で、ハード面での整備は難しいことがわかり、当面は、活動名としての「センター」として始めることになった。

### 2) 成果 (課題) が生まれた要因

### ●プロジェクトで行った取組からの知見

試行錯誤を繰り返しながら取組を進めてきたことで、住民のニーズに関しては、話し合う前から共通認識ができていたことから、事業内容に関しては、すぐに決まった。事業内容として挙げた3つの活動が保見団地に欠けていたこと=課題であったが、課題が生じた要因は、これまで必要なことだとわかっていても、軋轢を恐れて誰も手を出さなかったことにあると考えられる。しかし、当プロジェクトで自慢できることは、軋轢があっても、諦めずに粘り強く続けてきたという点であるため、その成果を生かして、センターの運営を行っていきたい。

### 3) 気づきと今後に向けて

センターは住民に新たな負担を強いるものではないが、それでも、新しいものに対する抵抗感が強い住

民がいることがわかった。4月からセンターが立ち上がるが、活動を通じて、住民の方々の理解を深め、 将来的には、具体的な場所としてセンターを設置していきたい。

### 4) 成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

<保見団地センター設置要領>

- 第1条 保見団地において、多様な住民が支え合い、顔の見える関係性が息づく、あたたかい故郷のような地域・社会になることをめざすために保見団地センター(仮)(以下「センター」という。)を設置する。
- 第2条 事務局は保見団地内に置く。
- 第3条 センターは、第1条の目的を達成するため、以下の事業を行う。
  - (1) 住民がなんでも聞ける話せる場づくり
  - (2) 保見に関わる団体・個人のネットワークづくり
- (3) 住民が一緒になって行う活動
- (4) その他、センターの目的に沿った事業
- 第4条 センターの活動は、月曜日・水曜日・金曜日の 10 時から 17 時まで及び日曜日の 13 時から 17 時までとする。ただし、これら以外であっても、必要に応じて活動することができる。
- 第5条 センターの活動には住民及び保見団地に関わりを持つ人であれば誰でも参加することができる。
- 第6条 センターの運営は、設置目的に賛同する団体・個人が運営委員会(以下、「委員会」という)を 設置して行う。
- 第7条 事務局のスタッフは委員会が選出する。
- 第8条 この要領の改正は委員会が行うものとする。
- 第9条 この要領に定めるもののほか、必要な事項は委員会において別に定める。

付 則

この要領は、2023年4月1日から施行する。

## 4-4 関係者会議を通して、団県住宅供給公社、愛知県、豊田市、在名古屋ブラジル総領 事館、地域の団体等との定期的な会議を行う仕組みができたか。関係者会議を通して多文 化多様性の輝く地域づくりは前進したか。

成果4	関係者間での情報や課題の共有								
	県住宅供給公社、愛知県、豊田市、在名古屋ブラジル総領事館、地域の団体等								
	な会議の設	置の合意及び開催要領の施行							
アウトカム	初期値	目標値	実績						
指標 4	無	県住宅供給公社、愛知県、豊田市、在名古屋ブラ	今後も定期的な情報共有をし						
		ジル総領事館等との定期的な会議の設置の合意 ていくことの合意(最後の関							
	がされ、開催要領ができている 係者会議で確認予定)								
評価方法	関係者会議	議事録より							

### 1)確認できた事実

### ●関係者会議の開催

以下のとおり、関係者会議を開催し、プロジェクトの活動報告等を行い、意見交換することにより、プロジェクトや保見団地について理解を深めてもらうことができ、また、こうした協力ならできるといった前向きな意見も出された。

- 第一回 2020年11月20日(金)10:00-12:00県営集会所
- 第二回 2021年3月26日(金)10:00-12:00県営集会所
- 第三回 2021 年8 月17 日 (火) 10:00-12:00 保見交流館多目的ホール

第四回 2022年1月27日(木) 10:00-12:00 Zoom

第五回 2022年9月29日(木) 13:30-15:30保見交流館多目的ホール

第六回 2023年3月(予定)

### 2) 成果 (課題) が生まれた要因

### ●関係機関の協力

保見団地に関しては、これまで関係機関と必要な時に個別に関わりを持つことがあったものの、情報共有・情報交換の場として、一同に集まってもらうことはなかった。今回の関係者会議は、初めての試みであったが、関係機関は最初から協力的であり、快く参加してくれた。これは、関係機関にとっても、外国人の集住している保見団地は関心の高い地域であり、プロジェクトに対する期待が大きいためだと思われる。

### 3) 気づきと今後に向けて

関係機関の第1回は行政機関に中学校を加えた8団体だけであったが、第2回からはNPOを加えた10団体、第5回からは他の自治区や小学校を加え17団体に増えた。これは、活動を続けるうちに、地理的に近い関係者にも枠を広げる必要性があることに気づいたためであるが、新たに加えた団体は、距離は近くても意識の上では遠くにあり、あまり参加してもらうことができなかった。今後は、行政機関には引き続き見守ってもらえるように関係を継続していくとともに、地域への情報発信等を行い、関心を持ってもらえるように努めていきたい。

### 4) 成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

第5回に初めて参加の公団区長から、「保見団地は県営だけではない。公団には分譲住宅もあり日本人住民も多く住んでいて、日本人側の意識を変えていくことがすごく大変」との意見をいただいた。彼女は、長年NPOとして外国人支援の活動もしてきているが、近所の住民から聞こえてくるのは「外国人の支援よりも日本人の支援を」ということだったと振り返られていた。区長になってやっと少しずつだけれど、みんな一緒にやっていこうという雰囲気が出てきたと感じるとも。外国人支援は日本人支援にもつながり、それはつまり住民支援だという思いは強く、しかし近所付き合いの中で「外国人側」と見られるなど、住民として活動していくことの難しさやジレンマの話しは印象的だった。恐らく外国籍住民にも同じことが当てはまり、「日本人側」「目立ちたがり屋」などと言われることを避けるために声を上げない住民も多数いるのではないかという気づきにもなった。

また、「我々としても手探りでやっている状態である。みなさんと今後の方向性を考えたい。アンケート結果で、外国人の困っていることが、『近所付き合いがない』 というところが面白いし、きれいにしたいと思っている人が多いのも面白い。この活動がうまく結びついたらすごい力が出るような気がする」とか、「具体的な事業としていいと思うのは、外国人が支援される側でなく支援する側へなれるような取組である。こうした取組は、地域の健康を守ることにもつながる。我々は、指導員の資格を与えるような講習会を提供することができる」といった協力を申し出るような意見もあり、今後の取組につなげていきたい。

### <関係者会議の様子>



## 4-5 コミュニティビジネスのシナリオは明確化したか。地域課題解決や地域の人が活躍する内容になっているか。

成果5	コミュニティビジネスをする上での課題の把握						
アウトカム	シナリオの作成						
指標 5	初期値	目標値	実績				
	無	作成	作成				
評価方法	・コミュニティビジネスを検討している住民に対して講座を開催						
计侧力法	・リユース工房の実施に向けての準備						

### 1)確認できた事実

### ●コミュニティビジネス講座の開催

以下のとおり、コミュニティビジネス講座を開催したが、場所がコロナの影響で県営集会所から保見交流館に変更になり保見団地から遠くなったこと及びコミュニティビジネスという概念のわかりにくさのため参加者は減っていった。

第一回 2021 年 3 月 7 日(日)14:00-16:00 県営集会所「コミュニティビジネスとは」

第二回 2021 年 4 月 25 日(日)14:00-17:00 保見交流館「コミュニティビジネスとは 2 |

第三回 2021年5月23日(日)14:00-17:00保見交流館「事業計画」

第四回 2021 年 6 月 20 日(日)14:00-17:00 保見交流館「資金計画」

第五回 2021 年 7 月 18 日(日)14:00-17:00 保見交流館「ネギ王の話」

### ●団地内秋祭りに出店

講座とは別に、コミュニティビジネスのきっかけになり得るのではないかということで、2022 年 10 月の団地内秋祭りに住民が出店した。手作りキャンディー、洋服、小物、自家農園野菜、マッサージ、子ども向け絵本の店が集まった。今回は場所の確保や検便などの準備段取りなどは実行団体が行ったが、今後は自分たちで必要な準備を行い、許可を取るなどの活動に繋げられる貴重な体験となった。

### ●リユース工房の中断/別シナリオの作成

プロジェクトとしてもコミュニティビジネスができないかと考え、保見団地において課題の一つである 粗大ゴミの放置をなくすため、リサイクル工房をつくってはどうかということになり、準備を始めた。 まず、「わっぱの会」が取り組んでいるリサイクル工房の見学に行ってイメージを共有した後、リサイク ル工房の候補地として、ほとんど使われていない駐輪場の活用が提案され、駐輪場の修復等を行った。 しかし、新たな構築物をつくることはできないことがわかり、駐輪場は、オープンな形での粗大ゴミを 保管する場としてしか使うことができず、かえって、そこに粗大ゴミが置かれる恐れが出てきたため、 その管理をどうするかといった問題が出てくる中で、リユース工房の構想は中断した。その一方で、プロジェクトを進める中で行ってきた高齢者支援やフリーコーヒーに対する住民のニーズが高いと見込 まれることから、コミュニティビジネスの切り口で持続可能な取組となるよう、シナリオを作成した。

### ●事例調査 群馬県大泉町へ視察

事例調査として、県住協職員 1 名、実行団体 2 名、計 3 名が群馬県大泉町へ視察に行った(2022 年 8 月 10 日、11 日)。観光協会の案内で様々な国の店に行き、話を聞いた。町全体で外国人を受け入れた歴史があり、現在でも受け入れている側の意識が好意的であると感じた。「外国人が入ってきた」という印象を持っている保見団地とは土台が違うが、現在の外国籍住民の生活の課題などは共通しており、コミュニティビジネスについては、サポートや広報の仕方など大いに参考になった。

- ・場所があればやってみたいという住民が多い(大泉町は土地が広く、比較的貸してくれる大家も多い)
- ・長期的計画を立てることが難しく、1年足らずで閉まる店も多い
- ・必要な書類や許可などは一緒に確認をして進める
- ・国ごとのコミュニティがあるので、キーマンを見つけつながりを作る
- ・商工会議所などとも連携し、日本人の店、外国人の店などと分けない
- ・顔の見える関係を大切にし、継続的にお店回りをして挨拶雑談をする
- ・最初は観光資源としてだったが、住民として地域に馴染むことが理想

### 2) 成果 (課題) が生まれた要因

### ●コミュニティビジネスに対する認識の違い

まちづくりにおいて、コミュニティビジネスは事業を持続的に行っていくために有益な手法であるが、まだ浸透していない手法であるため、担い手として想定していた住民は、「ビジネス」という言葉に引っ張られ、コミュニティビジネス講座は、コミュニティのためというより、個人的に収益が上げられるための方法を教えてくれる講座だと思って参加した人が多かった。そのため、講座の内容と期待していたものが違っていたため、参加者が減ってしまった。一方で、管理者である県もコミュニティビジネスを利益目的の事業と捉え、コミュニティビジネスはコミュニティのためにやる事業であるにもかかわらず、公営住宅内で収益の上がる事業はやってはいけないという見解を崩すことができなかった。そのため、講座参加者に対して保見団地内での起業を進めることができず、中途半端なまま、本来の目的を果たすことができず、講座を続ける意義がなくなってしまった。また、リユース工房についても、粗大ゴミを使えるようにして売る行為が収益事業としか解釈してもらえず、売ることができないのであれば、単に、粗大ゴミを集め、欲しい人にあげるだけの取組になってしまい、その取組を行う費用が捻出できないため、この構想も崩れてしまった。今後は、コミュニティビジネスに対する理解を広げていく必要がある。

### ●公営住宅としての制約

公営住宅の敷地内で収益事業はできないということに加え、本来の目的以外に土地や建物は使えないという公営住宅としての制約がある。公営住宅内でコミュニティビジネスを行うことは、なかなか難しいが、粘り強く、こうした制約をなくしてもらうよう交渉するか、制約を前提にして考えていかなければならない。

### ●取組を進める中で見えてきたニーズ

リユース工房の構想が崩れたのは、制度面での壁の他に、住民のニーズとのズレもあったのかもしれない。粗大ゴミに困っているのは自治区役員であり、それ以外の住民のニーズは、別のところにあり、気軽に集まれる場所や介護保険サービスではやってくれないような日常的で些細なお手伝いにあった。これまでなかったサービスは、実際にやってみて初めてニーズが顕在化するものである。これから、制約を取っ払っていかなければならないが、取組を進める中で見えてきた高齢者支援やフリーコーヒーにコミュニティビジネスの可能性を感じている。

### 3) 気づきと今後に向けて

活性化を図るために、安易に「コミュニティビジネス」をやってはどうかという計画を立ててしまった。 今後は、視察で伺った群馬県大泉町の事例を参考にしながら、こうした無理解や制約がある中で、何が できるかを考えていきたい。

### 4) 成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

<リユース工房のために駐輪場に壁を設置>



<リサイクル工房見学の様子>



<コミュニティビジネス講座の様子>



<大泉観光協会>



<団地内秋祭りの様子>





## 5 特筆すべき成果

~予測していなかった成果、副次的な効果、注目すべきエピソード等~

### ●若者たちの活躍

プロジェクトを構想している段階では、若者たちは参画していなかった。学生の活用ということは考えていたが、指示をして動いてもらうという役割で、受け身の関わり方しか想定していなかった。しかし、プロジェクトを進めるうちに、学生たちが主体的に子どもたちの支援<JUNTOS>を始めた。JUNTOSは、今では、いろいろな所で取り上げられるようになり、保見団地プロジェクトの最もわかりやすい成果の一つとなった。

また、南米のスラム街でまちづくりに関わった若者が、プロジェクトに関心を持ち、まちづくりの観点から<将来ビジョンブック>を作成した。将来ビジョンブックは、ビジュアルやイラストを多用したものとなっており、これまでの多文化共生のイメージを覆すワクワク感があり、作成プロセスにおいても、保見団地の模型を見ながらワークショップを行うという、これまでの多文化共生にはない手法を使った。今後の多文化共生のビジョンづくりにおいて、こうした手法は先進的なものとして評価されていくだろう。

保見団地で育った若者による<フリーコーヒー>は対話を生んだ。住民の意見を聞くことの重要性は誰でもわかっていることだが、どうしたらいいのかわからなくて困っている。あらかじめ場を設けるのではなく、自然に場ができあがっていく仕掛けをつくること。フリーコーヒーは、そのことを教えてくれた。

### ●外国人からの救いの手

プロジェクトはコロナ禍と共にあり、様々な制約が課されることになった。活性化をめざす取組においては、集まる場が必須であるが、一番の核と考えていた集会所が感染拡大を防ぐために使えなくなってしまった。大人であれば、保見団地から少し離れた保見交流館でも集まることは可能であるが、子どもたちに対する取組は、やはり保見団地内でなければならない。場所探しに困っていると、公団住宅の敷地内で外国人が施設管理者となって運営されている高齢者施設「ケアセンターほみ」が場所を貸してくれることになり、外国人を支援するのではなく、外国人から支援されるという予想外の展開を見せた。日本人が支援する段階では、対等の交流にはならなかったが、支援されることによって、その後、対等の交流が生まれた。

## 6. 協働・連携による課題解決の体制の充実

### 6-1 チーム内の協働・連携

### 1) チーム内で協力した内容

B1:県営保見自治区、 B2:NPO トルシーダ

B3:保見プロジェクト(中京大) B4:外国人との共生を考える会

(1)ビジョン作成							
協力活動の項目	B1	B2	В3	B4	協力した内容		
広報	•	•	•		日常相談、フードパントリー、子ども食堂等での広報		
内容的な連携	•	•	•	•	検討会議に参加、意見交換、情報共有		
作業面の手伝い		•	•		翻訳、校正作業		

### 協力による効果

チーム内で、将来ビジョン検討会議を7回(4/24、7/24、8/21、9/18、10/30、11/27、12/29)行った。 9月のみ対面、他は Zoom だったが、WS 形式で実行団体それぞれが意見を出し合いフィードバックさせていくという方法で、具体的な将来ビジョン作成につながった。11月以降はパンフレットのレイアウトや

(2)コミュニティビジネスの検討・シナリオ							
協力活動の項目	B0	B1	В3	B4	協力した内容		
広報	•	•			チラシ作成、翻訳、掲示、参加者集め		
内容的な連携	•	•	•	•	講座開催場所の提供、資料翻訳、通訳		
作業面の手伝い		•	•		講座開催運営		
その他	•	•	•	•	リユース工房の検討・準備		

### 協力による効果

県住協は、保見団地を活動拠点にしておらず、イベントも年1回、セミナーを開催する程度であるため、各団体の得意分野に応じて、コミュニティビジネス講座の参加者集め、翻訳、運営等をお願いすることにより、円滑に進めることができた。また、リユース工房については、各団体の様々な観点からの知識を集めて検討を行うことができた。

(3)関係者会議								
協力活動の項目	B0	B1	В3	B4	協力した内容			
広報	•	•			関係者への連絡			
内容的な連携	•	•	•	•	会議内容の検討			
作業面の手伝い	•	•	•	•	会場確保、資料作成、印刷			

### 協力による効果

プロジェクト 1 年目から年 2 回開催し、合わせて、6 回目開催する予定である(6 回目は 2023 年 3 月頃)。 各実行団体のネットワークも活用し、幅広い団体機関に呼び掛けることができ、様々な視点から課題の共 有や解決に向けたプロセスの確認ができた。

### 2) 自団体の貢献と体制整備

### (1) 自団体がチーム対して行った協力内容、その効果と評価

コーディネート団体として、毎月のチーム会議を開催。本業を抱える実行団体を集め、情報の共有、課題認識、事業進捗状況等を確認し記録をとることにより、それぞれの取組が円滑に進むことに寄与した。

### (2) 自団体の体制整備、知見やノウハウの蓄積についての成果と評価

体制が手薄であったことが反省材料ではあるが、その分、実行団体やオブザーバーの手を借りることになり、かえって、コーディネート団体が突出した存在にならず、全体でまとめ上げたプロジェクトにすることができた。

### 6-2 チームの運営

1)チーム運営についての取り組み ※評価の★の数は、別紙1の基準による

A 目標の共有 評価

#### チーム構成団体が、目標に対して共通認識をもって事業に取り組むこと ★★★ 難しかったこと・課題が残ったこと 機能したこと・成果が生まれたこと 多文化多様性が輝く保見団地という大きな目標は 各実行団体の立場や活動内容から、持っている課題 意識が違うこともあったため、問題の解釈やすり合 共有できており、各実行団体の得意分野を生かした わせに苦労した。コロナ禍ということもあり、対面 活動になった。 で話し合うことも難しく、認識のズレを修正する手 間に時間を取られた。 B情報共有 評価 構成団体が、情報を共有して事業に取り組むこと \*\*\* 機能したこと・成果が生まれたこと 難しかったこと・課題が残ったこと 早い段階で、プロジェクトチームのメールアドレ チーム会議を毎月行っていた割には、情報共有がう ス、HP、FB を立ち上げ、チーム全員が情報を共有 まくいかずに、チーム内での認識のズレが生じるこ できるようにした。チーム会議を毎月行うことで、 ともあった。Zoom での話し合いが多かったり、合 各実行団体の活動報告と進捗状況、課題の共有を行 意の取り方を決めていなかったせいもあるが、日本 い、対策を話し合うことができた。 人同士であっても、世代や経験によって慣れ親しん できた文化の違いがあり、決まったと思っていた内 容が白紙に戻ることもあった。 C協働・役割分担 評価 構成団体が役割を担い、力を活かし合って事業に取り組むこと \*\*\* 機能したこと・成果が生まれたこと 難しかったこと・課題が残ったこと 住民である「県営保見自治区」、団地内で活動する 通常業務を行いながらのプロジェクトの活動のた 「トルシーダ」、隣接する大学で学生のフィールド め、団体同士の時間のすり合わせなどが難しかった。 ワークなども行う「中京大学」、防災専門の「共生の 会|がそれぞれが得意分野で活動し、補いあうこと ができた。 D 知見・ノウハウの蓄積 評価 構成団体の知見をノウハウとして蓄積し、チームで活用すること \*\*\* 機能したこと・成果が生まれたこと 難しかったこと・課題が残ったこと 実行団体以外にも、オブザーバーとして、行政職員、 日々の取組で精一杯であり、他の団体の知見をノウ 大学教員、看護師、地域づくり専門家などが関わり、 ハウとして蓄積するところまではいけなかった。 チーム内に情報を提供してくれた。中でも看護師に よるコロナに対する情報や対策は有用で、各団体の 活動に活用された。 Eチーム体制の強化 評価 新たな担い手・団体の参加・協力を得て、チーム体制を強化すること \*\*\*\* 難しかったこと・課題が残ったこと 機能したこと・成果が生まれたこと 住民の中には、新たな担い手・団体を受け入れるこ プロジェクトや実行団体の活動に興味を持ち、活動 とに拒否反応のある人がおり、立ち止まらなければ に参加してくれたボランティアや関係者が多く、彼 ならない場合があった。 ら/彼女らの協力なしには、プロジェクトの成功は

## 2) コーディネート団体としての取り組みと学び

なかった。今後とも継続して関わっていただけそう な担い手が確保できたことは想定以上の成果であ

った。

立場の異なる団体が一緒に取り組むことになったため、立場の違いからくる考え方の違いが大きく、その違いを埋める作業が大変であった。しかし、衝突を繰り返す中で、徐々にお互いのことがわかるようになり、将来ビジョンの策定やプロジェクト後の保見団地センターの構想を共有することができた。ど

ちらが正しいわけでもないことを前提に、対等な立場で、対話を通じて理解を深め合うことの大切さを 学ぶことができた。これは、プロジェクトにおけるコーディネートとしてだけでなく、外国人と日本人 の間を橋渡しすることにも通じると感じた。

## 6-3 支援対象者・参加者の参加促進、関係の形成

(1)ビジョン作成			
知っている	参加してくれる	少しお手伝い	自発的・主体的参加
九公区即位之(7.4)	WS に参加してくれ	なんとなくフリーコーヒ	
自治区関係者(7名)	た人たち (35名)	ーを飲みにきた人 (20名)	_

### 変化・成果

将来ビジョン作成 WS として、住民との意見交換会を 3 回(9/6、9/7、9/10)開催した。9/6、7 は トルシーダの日本語教室で朝と夜、参加者 20 名。9/10 は土曜日の学習支援教室の子どもたち 15 名。 大人も子どもも、自分たちが住んでいる団地への愛着があり、団地をよくしたいという思いがよく伝 わった。10/2 には自治区役員にも意見を聞き、団地の模型の周りに集まって、具体的なイメージを話し合うことができた。

### 変化・成果(課題)が生まれた要因、評価

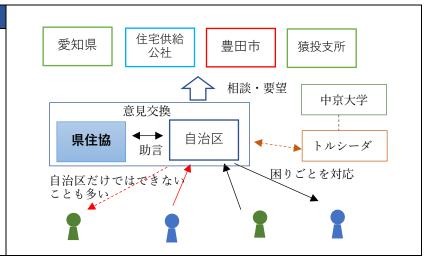
活動を通して、話ができる関係性や雰囲気を作ってきたことが大きい。日本語教室や、毎週金曜日の朝、フードパントリーと子ども食堂の横でフリーコーヒーを開催。徐々に住民が立ち寄るようになり、年金の話、特殊詐欺の話など、住民同士の情報交換や意見交換の場となりつつある。

### 6-4 課題解決に取り組む協力関係の変化

### 1)協力関係構築の実績

### 本事業前の関係

生活ルールを守らないことからくる問題の解決は、主に自治区に寄せられ、少数の役員が直接解決に当たるか、住宅供給公社や行政に相談・要望を行って解決することが多かった。それに対して、県住協は意見交換や助言を行うしかなかった。また、トルシーダとはアートプロジェクトを通して少し関係はあったが、中京大学との関係はなかった。

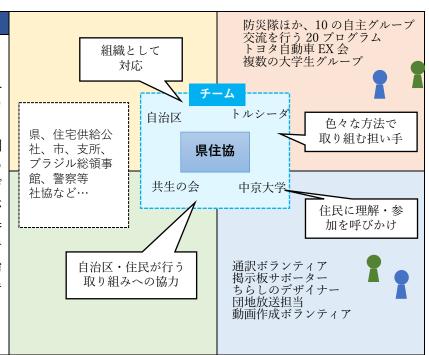




## 事業を通してできた関係

県住協がコーディネートしながら、 チームを組んで取り組んだことで、 行政組織に対して、直接の要望以外 にも、情報や知恵を出し合って協力 する場面が増えた。

また、県住協としては、住民との関係に重点を置いていたが、チームのネットワークを活かして、通訳、デザイン、動画づくり等を担う人材が発掘でき、住民に積極的に理解・参加を呼びかけられる体制が強化できた。また、一斉清掃のような自治区の活動に参加したり、高齢者お手伝いのような取組により、チームとして地域に溶け込むことができた。



事業を通してできた関係	1	愛知県県営住宅管理室	管理面での連携・助言
関係者会議を通じて行政機関	2	愛知県多文化共生推進室	団地内の多文化共生への協力・助言
等との関係ができた。	3	在名古屋ブラジル総領事館	団地内のブラジル人の状況の共有
d C S MINA C C 7C o	4	愛知県警察本部・豊田警察署	団地の安全・安心に向けての取組
	5	豊田市役所・猿投支所	自治区活動へのサポート
	6	豊田市社会福祉協議会	福祉面でのサポート
	7	保見中・東保見小・西保見小	子どもの状況の共有・見守り
	8	NPO 法人子どもの国	子どもの学校外での見守り
	9	トヨタ自動車	社員のボランティア
	10	日本赤十字社愛知県支部	人材育成の場の提供

### 2)協力関係を構築する上で行った工夫、評価

関係者会議を開催することで、プロジェクトの取組を見える化した。また、協力したいと申し出てくれた人たちを外部の人間だからと言って排除することはせず、オープンに受け入れることにより、チーム内にないノウハウや技術を積極的に取り入れた。ただし、見える化やオープンな受け入れは、まちづくりを進める上で、当然のことであり、これだけであれば、評価としては、及第点以上のものとはならない。最も評価できることとしては、高齢者の話し相手となり、困り事にも対応し、電球の取り換えのような小さな関係性を積み上げていくことで、地域に溶け込むことができた点である。老人会の旅行に誘われ、一緒に行くほどの関係性ができたことは特筆すべきことであると考えている。

## 7. 結論、今後の展望、教訓

### 7-1 結論:中長期アウトカムに対する本事業の妥当性

保見団地において、多様な住民が支え合い、顔の見える関係性が息づく、あたたかい故郷のような地域・社会をめざして語り合える場ができている

事業実施プロセス ★★★★ 事業成果の達成度 ★★★★★

★★★★★ 想定した水準以上にある ★★★★ 想定した水準にある ★★★ 想定した水準にあるが、一部改善点が必要 ★★ 想定した水準に達するのに改善が必要 ★多くの改善の余地がある

### ●上記のように結論を出した理由

### <事業実施プロセス>

実施する予定だった事業をやれなかったことから、一部改善が必要ではあるが、予定になかったことであっても臨機応変にニーズに合わせて実施することができたため、プラスマイナスで「想定した水準にある」と評価した。

やれなかった事業は、コミュニティビジネスに関することである。コミュニティビジネスは、理念だけで事業計画に入れてしまったが、物理的にやれるのかどうか、また、コミュニティビジネスに対する住民のニーズを把握しないまま始めてしまったのが失敗の原因であった。おそらく潜在的なニーズはあり、工夫次第でコミュニティビジネスを実施することは可能ではないかと思われるが、そのためには、大変な労力が必要になることがプロジェクトを始めてからわかった。しかし、その一方で、住民との関わりに関しては、意見交換会といった堅い事業しか想定していなかったが、フードパントリーや高齢者お手伝い、フリーコーヒー、移動公民館などの当初は考えてもいなかった取組を実行団体やボランティアの方々が独自に始めてくれた。そのため、県住協としては、想定した水準に達した事業とはなっておらず、改善が必要なところもあるが、全体として、想定した水準にあると評価した。

### <事業成果の達成度>

目標である「多様な住民が支え合い」については、日本人側が支えるだけでなく、JUNTOSの活動等において、外国籍住民から支えてもらえたこと、「顔の見える関係性が息づく」については、高齢者や自治区との顔の見える関係づくりができたこと、「あたたかい故郷のような地域・社会をめざして語り合える場」については、団地の模型を作製してWSを行ったことにより、一時的ではあるが、そうした場づくりができたことが成果として挙げられる(詳細については、これまで記したとおり)。さらには、プロジェクト終了後の保見団地センターにとって一番大切な事業は、「住民がなんでも聞ける話せる場づくり」であり、現時点では、集会所等を使って、そうした場づくりを行うことを想定しているが、管理者

との調整がつけば、空き部屋に「住民がなんでも聞ける話せる場」が恒常的につくれるのではないかという期待を込めて、「想定した水準以上にある」とした。

### 7-2 今後の取り組み

今後は、プロジェクトに関わった県営保見自治区、トルシーダ、中京大学が中心となって「保見団地センター」を運営し、これまでの取組の規模を縮小したり、変更したりしながら継続していく予定である。 現時点で想定している事業は以下のとおりである。

- ・子育て(子育てサロン、学習支援等)
- ・高齢者(高齢者サロン、高齢者生活支援・お手伝い、多文化シルバー人材センター等)
- ・よろず相談&フードパントリー
- ・アート&文化(移動公民館、地球家族等)
- ・近所づきあい (カフェ、朝市、コミュニティ公園等)
- ・自治区活動応援(防災、ゴミ、交通安全等)

### 7-3 事業から得た知見、類似する課題に取り組む団体等に役立つ教訓

多文化共生の事業に取り組む上では、日本人と外国人の文化の違いよりも、日本人同士の文化の違いに気をつけるべきである。日本人と外国人の間では、元々、文化が違うという前提を踏まえての対応をしているし、本来、望ましくないが、外国人はマイノリティ意識からくる遠慮があるので、トラブルは回避される傾向にある。しかし、日本人同士の場合は、それぞれの日本文化を共通の日本文化と混同してしまい、言葉を尽くさなくてもわかるはずとの思い込みにより、言いたいことを省略するなど、不親切な日本語が使われることによって誤解が生じやすく、そうかと言って、言いたいことを言ったとしても、言いたいことを言うという文化を持たない日本人にしてみれば、言いたいことを言うこと自体が失礼な行為に当たってしまい、思っていることを言えないというジレンマがある。本当に難しいのは日本人同士の関係である。これを解決するために必要なことは、一緒に助け合いながら取組を進めていくことである。机上で理屈だけで物事を進めようとすると、どうしても考え方や立場の違いから衝突が起きてしまう。一緒に取組を進めることにより、その過程でお互いに譲り合うようになり、その譲り合いの気持ちは、他の取組にも波及し、引いては、全体としてお互いの理解が進んでいくことになると思われる。

## 8. 資料等

- ①「多文化多様性が輝く保見団地」をめざした住民アンケート調査報告書
- ② 同報告書概要版
- ③ 保見団地将来ビジョンブック(未定稿)
- ④ コミュニティビジネスシナリオ
- ⑤ 自主活動団体・自主活動サークル一覧表